

「底が突き抜けた」時代の歩き方 437

福音書のアポリア ― ドストエフスキイ『大審問官』物語

映画『パッション』のメッセージは、今こそ世界は二千年前のイエスが十字架上に釘づけされた受難の原点に立ち返れ、というものだ。もっと激しいいかたをすれば、こんな矛盾と虚偽と罪深さに満ち満ちた二千年後の世界を出現させるために、イエスは十字架上で息絶えたのではないということだ。カトリック教徒であるメル・ギブソン監督からすれば、もちろん、キリスト教はイエスという原点に立ち返れ、というものであった。では立ち返ってみるなら、一体何がみえてくるのか。なにを覗き込まなくてはならないのか。映画を思い浮かべるなら、みえてくるのは二つの光景であった。一つは逮捕されたイエスが鞭を打たれて十字架に磔にされていく光景であり、もう一つはイエスの受難を離れて眺める群衆の光景であった。

この二つの光景はどうしても交叉することができなかった。というより、交叉しえないことによって、二つの光景は成り立っていたといえる。イエスは渦中の人であり、弟子たちを含む群衆は渦中のイエスを眺める観客であった。十字架上のイエスと彼を下から眺める群衆との距離は、視覚では測ることができないほどに遠かった。この遠さはイエスと彼に従う弟子たちとをいつも隔てている遠さであった。イエスが弟子たちを含む群衆に向かって、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と生前に語っていたことを取りだしていうなら、十字架上のイエスと彼を下から眺める群衆との遠さは、「自分の十字架を負うて」突き進む者と、まだ「自分の十字架を負う」ことができずにイエスに依存している者たちとの遠さにほかならなかった。十字架上のイエスは、目には見えなかった「自分の十字架を負う」ことの遠さをはっきりと目に捉えるものとして突きつけていたのである。

この〈遠さ〉はイエスの死後、「イエスの復活」として引っくり返され、弟子たちの宗教活動の内部に基軸として回収されていくことになった。「イエスの復活」の中でイエスはまたもや遠去けられ、キリストとして護符の力を弟子たちの宗教活動に注ぐようになったのである。イエスの死後、当然のことながらイエスは弟子たちを叱りつけることをしなくなった。いや、できなくなった。弟子たちはイエスの死後、漸くイエスの重圧から解放され、ただ単に天上から自分たちを祝福のうちに見守ってくれて、宗教活動の困難さを慈愛の深さのうちに優しく包み込んでくれるキリストとして自分たちの中に甦ってくれることを願うようにして、そのような自分たちのキリスト像を造型していったのである。イエスが生きて共に活動をしていた間は封じ込められていた、イエスの中

に期待するキリスト像は、イエスの死後、弟子たちの思いの中でなんの支障もなく制限もなく、空想として奔出することになったといえる。

ここで押さえておくべき重要なことは、「イエスの復活」は全くありえなかったということだ。イエスは「復活」させられなかったのである。「自分の十字架を負う」てイエスについてきなさい、と常日ごろ弟子たちに言い聞かせていたイエスの言葉も、その言葉に含まれていたイエスと弟子たちの〈遠さ〉もすべて、イエスの死と共に消滅させられてしまったのだ。自分たちの前に厳然と立っていたイエスが死によって退けられ、自分たちをただ天上から慈愛深く見守ってくれるキリストを弟子たちが宗教活動の中心に据えたとき、支配秩序に対するイエスの反逆的な活動は全くの宗教活動に貶められてしまったのである。イエスの反逆的な活動はローマ帝国の支配体制と結託しているユダヤ教支配秩序との闘いに真正面から向かっていたが、その闘いの中に宗教的な要素はあまり含まれていなかった。つまり、宗派闘争的な色彩は帯びていず、ユダヤ教支配秩序の偽善を攻撃するに、別の宗教をもってしたわけではけっしてなかった。

しかし、イエスの反逆的な活動がキリスト教という新たな宗教活動の中に取り込まれていったとき、マタイ福音書にみられるように、憎悪剥き出しの激烈な宗派闘争が展開されていった。キリスト教の存続が至上の課題となったのだ。キリスト教が生き残るためにはユダヤ教支配秩序を覆して、自らの宗教が支配秩序にまで上りつめなければならなかった。なんのことはない、イエスが徹底的に反抗したユダヤ教支配秩序にキリスト教支配秩序が取って代わったにすぎなかったのである。熾烈な宗派闘争と秩序からの激しい迫害に耐えながら4世紀末、キリスト教はテオドシウス帝によってローマ帝国の国教としての地位を獲取したのを我々は歴史で知るが、キリスト教は以後、時の覇者の宗教支配イデオロギーとして広められていくのである。

時代の支配秩序に反逆することをやめて、支配秩序の宗教イデオロギーとして君臨したキリスト教の歴史をみていると、本当の意味での「イエスの復活」が二千年を経た現代の貧困と疎外された人々の間に成就する必要があるのではないか、という気が起こってこないでもない。イエスは自分の死後、自分をキリストとしてまつりあげた宗教がどのような状態に辿り着いているか、知らなくてはならないのではないか。知る義務と責任があるのではないだろうか。ドストエフスキは『カラマーゾフの兄弟』の中の「大審問官」物語の中で、イエスを16世紀のスペインのセヴィリヤ、《神の光栄のために毎日国内にたきぎの山の燃えていた、恐ろしい審問時代》（米川正夫訳、以下同）に登場させる。イヴァンは自分が作った詩劇『大審問官』を、弟アリョーシャに語って聞かせるという体裁をとって、物語は進行していく。

キリストが《地上をみずからの王国となしふたび出現しようと約束してから、もう15世紀たっているのだ。『こはすみやかに来たるべし。されど、その日と時とは神の子みずからも知る能わず。ただ天にましますわが父のみこれを知りたもう』と予言者も

しるし、キリスト自身もまだ地上に生きているところにこう言ったときから、もう15世紀たっているのだ。しかし、人類は以前と同じ信仰、以前と同じ感激をもって彼の出現を待っている、(…) なぜなら、天より人間に与えられた保証がなくなって以来、もう15世紀からたっているではないか！》キリストは、《懊惱^{おうのう}し苦悶しながら、暗い罪におおわれていながらも、幼児のように自分を愛してくれる民衆のところへ》、ほんのちょっとでも下ってやろう、という気を起こしたのだ。

《むろんこの下界来降は、彼がかつて約束したように、天国の光栄に包まれて世の終わりに出現するのとはまるで違う。決して『東から西へかけて輝きわたるいなずま』のごとき出現ではない。キリストはただほんの一瞬間でもいいから、わが子らを訪れたいになったのだ。そして、ことさら異教のやからを烙く焚火のはぜる音もすさまじい土地をえらんだのだ。限りなき慈悲をいただいたキリストは、15世紀前に三年間、人々のあいだを遍歴したと同じ人間の姿を借りて、いま一度民衆の間へ現われたのだ。彼は南方の町の『熱き巷^{ちまた}』へくだったが、それはちょうど『いかめしき火刑の庭』でほとんど百人に近い異教徒が、ad maiorem gloriam Dei（神の大いなる栄光のために）、国王はじめ、廷臣、騎士、僧正、たおやかな女官、およびセヴィリヤのおびただしい群衆の面前で、大審問官の僧正の指揮のもとに、一度に烙き殺された翌日であった。キリストはいつもなくおもむろに現われた。すると一同の者は、—— 奇妙な話ではあるが、—— それが主であることを悟ったのだ。ここは、ぼくの詩の中でもすぐれた個所の一つとなるべきところなんだ。つまり、どういうわけでみんながそれを悟るか、という理由がすてきなのだ。民衆はうち勝つことのできない力をもって、彼のほうへ押し寄せたと思うと、たちまちその周囲を取り囲み、しだいに厚く人がきを築きながら、彼のうしろに従って行く。彼は限りなき憐憫^{れんぴん}のほほえみを静かに浮かべながら、無言に群衆の中を進んで行く。愛の太陽はその胸に燃え、光明と力の光線はその目から流れ出て、人々の上に満ちあふれながら、応うごとき愛をもって一同の心をふるわす。彼は一同の方^{かた}へ手を伸べて祝福したが、そのからだばかりか、ただ着物に触れただけで、いっさいのものをいやす力が生じるのだ。》

イエスがほんのちょっとの短い間に、盲目の老人を見えるようにし、棺の中の少女を生き返らせる奇跡を行っているところを、大審問官の僧正が通りかかる。《彼はほとんど90になんなんとしているけれども、せいの高い腰のすぐな老人で、顔はやせこけ、目は落ちくぼんでいたが、その中にはまだ火花のような光がひらめいている。彼の衣服はきのうローマ教の敵を烙いたときに、人民の前でひけらかしていたような、きらびやかな大僧正の衣装ではなく、古い粗末な法衣^{ころも}であった。そのあとからは、陰うつな顔をした助役の面々や、奴隷や、『神聖なる』護衛の侍どもが、一定の距離を保ってつづいている。大審問官は群衆の前に立ちどまって、はるかに様子をながめていた。彼はいっさいのことを見た。棺がキリストの足もとへおろされたのも見たし、女の子が蘇生したのも見た。と、彼の顔は暗くなってきた。その白い厚い眉は八の字に寄せられ、目は不

吉な火花を散らし始めた。彼は指を伸ばして護衛に向かい、かの者を召し捕るように下知した。彼の権力はあくまで強く、人々は従順にしつけられ、戦々兢々^{きょうきょう}と彼の命を奉ずることになれているので、群衆はさっと護衛の者に道を開いた。そして、とつぜんおそい来たった墓場のような沈黙の中で、護衛はキリストに手をかけ、引き立てて行った。群衆はさながらただひとりの人間のように、いっせいに額が土につくほど老審問官に頭を下げた。老審問官は無言のまま一同を祝福して、かたえを通り過ぎた。護衛は囚人^{めしゅうど}を神聖裁判所の古い建物内にある、暗く狭い円天井の牢屋へ連れて来て、ぴんとかぎをかけてしまった。》

翌日、大審問官はあかりを手にとって、牢屋の中へ入っていく。

《『おまえはイエスか？ イエスか？』しかし、返事がないので、急いでまたつけたした。『返事しないがいい、黙っておるがいい。それに、おまえなぞ何も言えるはずがないではないか！ わしにはおまえの言うことが、あまりにもわかりすぎるくらいだ。それに、おまえはもう昔に言ってしまったこと以外に、何ひとつつけたす権利さえ持っていないのだ。なぜおまえはわしらのじゃまをしに來たのだ？（中略）しかし、おまえは明日どんなことがあるか知っておるか？ わしはおまえが何者か知らぬ、また知りたくもないわ。おまえがほんとうのイエスかまたはにせ物か、そのようなことはどうでもよい。とにかくにも、明日はおまえを裁判して、一ばん性^{しょう}の悪い異教徒として烙^{めしゅうど}いてしまうのだ。すると、今日おまえの足を接吻した民衆が、明日はわしがちょっと小手招きしただけで、おまえを烙く火の中へわれさきに炭をかきこむことであろう、おまえはそれを知っておるか？ おそらく知っておるであろうな』と彼は一分間も囚人の顔から目を離さないで、しみじみと考えこむようなようすでこう言いたした》

イヴァンは、「もうおまえはみんなすっかり法王に渡してしまったじゃないか。いまいっさいのことは法王の手中にあるのだ。だから、今となって出て来るのは断然よしてもらいたい。少なくとも、ある時期の来るまでじゃまをしないでくれ」と《ローマンカトリック教の最も根本的な特質》について老人に語らせながら、1500年前におまえは「われはなんじらを自由にせんと欲す」とよく言っていたが、「今おまえは彼らの『自由な』姿を見た」といって、老人はこう続ける。「が、いまわれわれはおまえの名によって、ついにこの事業を完成した。15世紀の間、われわれはこの自由のために苦しんだが、今はすでに完成した、きっぱりと完成した。おまえは、きっぱり完成したと言っても、ほんとうにしないだろうな？ おまえはつつましくかにわしを見つめたまま、憤慨するのもおとなげないというような顔をしておるな。しかし、そのつもりでいるがよい、人民は今、いつにもまして今このとき、自分らが十分自由になったことを信じている、しかし、その自由を彼らはみずから進んでわれわれにささげてくれた。おとなしくわれわれの足もとへ置いてくれた。けれど、これを成し遂げたのはわれわれだ。おまえが望んだのはこんなことじゃあるまい、こんな自由じゃあるまい？」

そして老人は、荒れ野での悪魔とイエスの問題を持ち出す。悪魔が発した《この三つの問いによって人間の未来の歴史が、一個の完全なる総合のうちに集約されているうえ、地上における人間性の解決できぬいっさいの歴史的矛盾をすべてつくした三つの形態が現わされている》と、人間の知恵を超える《永遠に絶対な英知》を悪魔の問いに見出す。40日40夜、断食をして空腹になっているイエスに、悪魔は試みていう、「もし神の子なら、これらの石をパンに変えてみせよ」。イエスはその問いに、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである、と書かれている」と答える。

老人はこの問いの意味をこう捉えている。

《「おまえは世の中へ出て行こうとしている。しかも、自由の約束とやらを持ったきりで、空手^{からで}で出かけようとしている。しかし、生まれつき下品でばかな人民は、その約束の意味を悟ることができないで、かえって恐れている。なぜと言うに、人間や人間社会にとって自由ほど耐えがたいものはないからだ！ この真っ裸な焼け野原の石を見ろ。もしおまえがこの石をパンにすることができたら、全人類は感謝の念に燃えながら、おとなしい羊の群れのように、おまえのあとを追うて走るであろう。そうして、おまえが手を引っこめて、パンをよこさなくなりしめぬかと、それのみを気づかって、永久に戦々^{せんせんきょうきょう}競々としておるに相違ない」と言った。ところが、おまえは人民から自由を奪うことを欲しないで、その申し出をしりぞけてしまった。おまえの考えでは、もし服従がパンで買われたものならば、どうして自由が存在し得よう、という腹だったのだ。そのときおまえは「人はパンのみにて生きるものにあらざ」と答えたが、しかし、この地上のパンの名をもって、地の悪魔がおまえに反旗をひるがえし、おまえと戦って勝利を博し、しかもなお、すべてのものがまた「この獣に似たるものこそ、天より火を盗みてわれらに与えたるものなり」と絶叫しながら、そのあとにしたがって行くのを、おまえは知らないのか。》

《彼らが自由でいる間は、いかなる科学でも彼らにパンを与えることはできないのだ！

しかし、とどのつまり、彼らは自分の自由をわれわれの足もとにささげて、「わたくしどもを奴隷にしてくださいでもよろしいから、どうぞ食べ物をくださいませ」と言うに違いない。つまり、自由とパンとはいかなる人間にとっても両立しがたものであることを、彼ら自身が悟るのだ。じっさいどんなことがあっても、(…)彼らは自分たちの間でうまく分配することができないにきまっているからな！ また決して自由になることができないということも、彼らは同様に悟るであろう。なぜと言うに、彼らはいくじなしで、不身持ちで、一文の値うちもない暴徒だからな。おまえは天上のパンを約束したが、(…)はたしてあのいくじのない、永久に罪ぶかい、永久に低俗な人間の目から見て、天上のパンが地上のパンとくらべものになるだろうか？ よし幾千人、幾万人のものが、天上のパンのためにおまえのあとからついて行くとしても、天上のパンのために地上のパンを蔑視することのできない幾百幾千万の人間は、いったいどうなるというのだ？》

《そのほか、この問題の中には、現世の大秘密がふくまれている。もしおまえが「地上のパン」を許容したら、個人および全人類に共通な永遠の憂悶にたいして、答えを与えることになったのだ。それは「なんびとを崇拝すべきか？」という疑問なのだ。自由になった人間にとって最も苦しい、しかもたえまのない問題は、少しも早く自分の崇拝すべき人を捜し出すことである。しかし、人間というものはまちがいなく崇拝に価するものを求めている。(中略)これらの哀れな生物の心配は、めいめい勝手な崇拝の対象を求めるばかりでなく、万人が信仰してその前にひざまずくようなものを捜し出すことにある。つまり、どうしてもすべての人といっしょでなければ承知しないのだ。この共通な崇拝の要求が、この世の始まりから、各個人および全人類の主な苦悶となっている。崇拝の共通ということのために、彼らは互いに剣をもって殺し合った。彼らは神をつくり出して、互いに招き合っている。つまり、「おまえたちの神を捨てて、われわれの神を奉じないか。そうしないと、おまえたちもおまえたちの神も命がないぞ！」というのだ。これは世界の終わるまでこのとおりだ。神というものが地上から消失失せたときでも、やはり同じことだ。彼らは偶像の前にひざまずくだろうからな。おまえはこの人間本性の根本秘密を知っていたらう、いや、知らぬはずはない。ところが、おまえはすべての人間を無条件で自分の前にひざまずかせるため、悪魔がおまえに勧めた唯一絶対の旗幟、つまり、地上のパンという旗幟をしりぞけた、しかも天上のパンと自由の名をもってしりぞけたではないか。》

だがイエスが答えたように、《人間生活の秘密はただ生きることばかりでなく、なんのために生きるかということに存する》ことも確かだ。《なんのために生きるかという確固たる観念がなかったら、人間はたとえ周囲にパンの山を積まれても、生活するをいさぎよしとせず、こんな地上にとどまるよりも、むしろ自殺の道を選んだに相違ない。これはまったくそのとおりだ。》地上のパンを超える、生きることの価値を求めてやまないのも人間だが、しかし、生きる価値を求めて茫漠たる原野をさ迷いつづけなくてはならなかった。《おまえは人間の良心を支配する代わりに、かえってその良心を増し、その苦しみによって、永久に人間の心の国に重荷を負わしたではないか。おまえは自分でそそのかし、^{とりこ}にされた人間が、自由意志でおまえに従って来るように、人間の自由な愛を望んだ。確固たる古代のおきてに引き換えて、人間はこれからさきおのれの自由な心をもって、何が善であり何が悪であるか、自分自身できめなければならなかった。(中略)もし選択の自由というような、恐ろしい重荷が人間を圧迫するならば、彼らはついにおまえの姿も、おまえの真理もしりぞけてそしるようになる。そして、『真理はキリストの中にない』と叫ぶようになる。なぜならば、おまえがあのようにたくさんの心配と解決のできない問題を与えたために、人間は惑乱と苦痛の中にとり残されたからだ。じっさい、あれ以上残酷なことは、とてもできるものじゃない。》

たっぷりと与えられた自由能耐えられるほど、人間は上等な生き物ではないという教

訓を悪魔との第一の問答から引き出して、老人は第二の問答へと移る。《かの恐ろしく賢^{さか}しい悪魔がおまえを殿^{みや}の頂に立たせて、おまえにこう言った。「もし自分が神の子かどうかを知りたいなら、一つ下へ飛んでみろ。なぜなら、下へ落ちて身をこなごなに砕かないよう、途中で天使が受け止めてはこんでくれるということが本に書いてあるから、そのときおまえは自分が神の子かどうかを知ることができるし、天なる父にたいするおまえの信仰のほども知れるわけだ」しかし、おまえはそれを聞いてそのすすめをしりぞけ、術におちいって下へ身を投げるようなことをしなかった、それはもちろん、おまえは神としての誇りを保って、りっぱにふるまったに相違ない。しかし、人間は、——あの弱い暴徒の種族は、決して神でないからな。おお、もちろん、あのときおまえがたったひと足でも前へ出て、下へ身を投げる構えだけでもしたなら、ただちに神を試みたことになって、いっさいの信仰を失い、おまえが救うためにやって来た大地に当たってこなごなとなり、おまえを誘惑したさかしい悪魔を喜ばしたに相違ない、おまえはそれを承知していたのだ。(…) いったいおまえのような人間がたくさんいるだろうか？(中略) 人間の本性というものは、奇跡を否定するようにできていない。ことにそんな生死に関する恐ろしい瞬間に、——最も恐ろしい、根本的な、苦しい精神的疑問のわき起こった瞬間に、自由な良心の決定のみで行動するようにできていないのだ。》

《人間は奇跡を否定するやいなや、ただちに神をも否定する、なんとなれば、人間は神よりもむしろ奇跡を求めているのだからな。この理をおまえは知らなかったのだ。人間というものは奇跡なしでいることができないから、自分で勝手に新しい奇跡を作り出して、はては祈祷師の奇跡や巫女の妖術まで信ずるようになる。(中略) おまえは、多くの者が「十字架からおりてみろ、そしたら、おまえが神の子だということを信じてやる」とひやかし半分からかったとき、十字架からおりなかった。つまり、例のごとく、人間を奇跡の奴隷にすることを欲しないで、自由な信仰^{しやうふく}を渴望したから、おりなかったのだ。おまえは自由な愛を渴望したために、一度で人を懾伏^{しやうふく}させる恐ろしい偉力をもって、凡人の心に奴隷的な歓喜を呼び起こしたくなかったのだった。

しかし、おまえは人間をあまり買いかぶりすぎたのだ。なぜと言うに、彼らは暴徒としてつくられてはいるものの、やはり奴隷に相違ないからな。(中略) 人間はおまえの考えたよりも、はるかに弱く卑劣につくられている！ いったいおまえのしたと同じことが、人間にできると思うのか？(中略) もしおまえがあれほど彼らを尊敬しなかったら、あれほど多くを要求しなかっただろう。そして、このほうが愛に近かったに相違ない。つまり、彼らの負担が軽くなるからだ。》

《われわれはおまえの事業を訂正して、それをば奇跡と神秘と教権の上に打ち建てたのだ。そのために民衆は、ふたたび自分たちを羊の群れのように導いてくれる人ができ、限らない苦痛の原因たるかの恐ろしい贈り物を、ついに取りのけてもらえるときが来たのを喜んだ。われわれがこういうふうに教えたのはまちがっておるかどうか、一つ言っ

て聞かしてくれ。われわれが素直に人間の無力を察して、やさしくその重荷をへらしてやり、いくじのない本性を思いやって、われわれの許しを得たうえなら、悪い行ないすら大目に見ることにしたのは、はたして人類を愛したことになるだろうか？

いったいおまえはなんで今ごろ、われわれのじゃまをしに來たのだ？（中略）われわれの仲間はおまえでなくて、きゃつ（悪魔）なのだ、これがわれわれの秘密だ！ われわれはもうずっと前から、もう八百年の間おまえを捨てて、きゃつといっしょになっているのだ。ちょうど8世紀以前、われわれはきゃつの手から、おまえが憤然としりぞけたものを取ったのだ。彼が地上の王国を示しながらおまえにすすめた、かの最後の贈り物を取ったのだ。われわれは彼の手からローマとケーザルの剣を取って、われわれのみが地上における唯一の王者だと宣言した。（中略）この事業は今日にいたるまで、ほんの初期の状態にあるが、とにかく緒^{ちよ}についてはいるのだ。その完成はまだまだ長く待たなければならぬし、まだまだこの地球は多くの苦しみをなめねばならぬが、しかし、われわれは目的を貫徹してケーザルとなるのだ。そうして、そのときはじめて、人類の世界的幸福を考えることができるのだ。ところで、おまえは、まだあのときケーザルの剣を取ることができたのに、どうしてこの最後の贈り物をしりぞけたのだ？ この力ある悪魔の第三の勧告を採用したなら、おまえは地上の人類が求めているいっさいのものを満たすことができたのだ。ほかでもない、崇拜すべき人と、良心を許すべき人と、すべての人間が世界的に一致してあり塚のように結合する方法である。なぜというに、世界的結合の要求は、人間の第三にしてかつ最後の苦悶だからである。全体としての人類は、常に世界的に結合しようと努力している。偉大な歴史を持った偉大な国民はたくさんあったが、これらの国民は高い地歩を占めれば占めるほど、いよいよ不幸になってゆく。というのは、人にすぐれて強い者ほど、人類の世界的結合の要求をはげしく感じるからだ、チムールとかジンギスカンとかいう偉大な征服者^{へいどん}は、宇宙を併呑しようと努め、旋風のごとく地上を疾駆した。しかし、これらの人々も無意識ではあるが、同じような人類の世界的、全般的結合の偉大なる要求を表現したのだ。全世界とケーザルの緋袍^{ひほう}を取ってこそ、はじめて世界的王国を建設して、世界的平和^{もろて}を定めることができるのだ。なぜというに、人間の良心を支配し、かつそのパンを双手に握っている者でなくて、だれに人間を支配することができようぞ！

われわれはケーザルの剣を取った。そして、これを取った以上、むろんおまえを捨てて、きゃつの跡について行った。（中略）おまえは自分の「選ばれたる人々」を誇っているが、しかし、おまえにはその選ばれたる人々しかない。ところが、われわれはすべての人を鎮撫^{ちんぶ}するのだ。（中略）これらの選ばれたる人々や、選ばれたる人々になりうる強者の多くは、もはやおまえの出現を待ちくたびれて、自分の精神力や情熱をまるで見当違いの畑へ運んで行った。まだこれからも運んで行くことであろう。そうして、ついには、おまえにそむいて自由の旗をひるがえすに違いない。しかし、おまえ自身から

してこの旗をひるがえしたではないか。ところが、われわれのほうではひとり残らず幸福になって、もう一揆を起こすものも、互いに殺し合うものもなくなるのだ。しかし、おまえの自由世界では、これが随所に行なわれている。おお、われわれはよくみな者に言い聞かしてやる、——おまえたちがわれわれのために自分の自由を捨ててわれわれに服従したときに、はじめておまえたちは幸福になることができるのだ、とな。》

《こうして、すべての者は、幾百万というすべての人間は幸福になるであろう。しかし、彼らを統率する幾十万人かの者は、それから除外されるのだ。つまり、秘密を保持しているわれわればかりは、不幸におちいらねばならぬのだ。つまり、何億かの幸福な幼児と、何十万人かの善悪認識ののろいを背負うた受難者とができるわけだ。幼児らは、おまえの名のために静かに死んで行く、静かに消えて行く、そうして、棺の向こうにはただ死を見いだすのみである。しかし、われわれは秘密を守って、彼ら自身の幸福のために、永遠なる天国の報いをもって彼らを釣ってゆくのだ。(中略) よいか、わしはおまえなぞ恐れはせぬぞ。よいか、わしもやはり荒れ野へ行って、いなごと草の根で命をつないだことがあるぞ。おまえは自由をもって人間を祝福したが、わしもその自由を祝福したことがあるぞ。わしも「数を満たし」たい渴望のために、おまえの選ばれたる人人の仲間へ、偉大なる強者の仲間へはいろいろと思ったことがあるぞ。しかし、あとで目がさめたら、気持ちがいに奉仕するのがいやになったのだ。それでまた引返して、おまえの仕事を訂正した人々の群れに投じたのだ。つまり、わしは傲慢なる人々のかたわらを去って、へりくだれる人々の幸福のために、へりくだれる人々のところへ帰って来たのだ。今にわしの言ったことは実現されて、われわれの王国は建設されるであろう。しつこいようだが、あすはおまえもその従順なる羊の群れを見るだろう。彼らは、わしがちょっと手を振って見せると、われさきにとおまえを烙くべき木の下に、まっかな炭をくべようと殺到するだろう。それは、つまり、おまえがわれわれのじゃまをしに来たからだ。じっさい、もしだれか一ばんわれわれの火刑に価するものがあるとすれば、それは正しくおまえなのだ。明日はおまえを烙き殺してくれる。》

イヴァンの詩劇の結末はこうつけられる。「ぼくはこんなふうにしまいをつけたいと思ったのさ。審問官は口をつぐんでからしばらくの間、囚人^{めしゅうど}がなんと答えるか待ちもうけていた。彼は、相手の沈黙が苦しかったのだ。見ると、囚人はしじゅうしみ入るように、静かに相手の目を見つめたまま、何ひとつ言葉を返そうとも思わぬらしく、ただじっと聞いているばかりだ。老人はたとえにがい恐ろしいことでもいいから、何か言ってもらいたくてたまらなかった。が、とつぜん、囚人^{めしゅうど}は無言のまま老人に近づいて、90年の星霜をへた血の気のなくちびるに静かに接吻した。それが答えの全部なのだ。老人はぎくりとなった。なんだか、くちびるの両端がびくりと動いたようであった。と、彼は戸口に寄って、さっと戸をあけ放しながら、囚人に向かって、『さ、出て行け、そして、もう来るな……二度と来るな……どんなことがあっても！』と言って、『暗き巷^{ちまた}』

へ放してやった。囚人はしずしずと歩み去った」

アリョーシャが「で、老人は？」と訊くと、「かの接吻は胸に燃えていたが、依然としてもその理想に踏みとどまっていた」

さて、イヴァンの口を借りたドストエフスキイの「大審問官」物語は、イエスが再び民衆の間に現れることになったとき、民衆にどのように迎えられるかを描いている、ということではない。イエスが存在していなかった1500年前の世界にイエスが初めて出現したときと異なって、イエスの再びの出現はイエス以後の世界であった。イエスの最初の出現によって、世界はすでに変質していた。その変質した世界の中から大審問官が姿をあらわして、再び出現したイエスにむかって、「なぜおまえはわたしのじゃまをしに来たのだ？」と言い放ったのだ。この言葉は、イエスの死後の世界はイエスが全く歓迎されない世界に、しかもイエスの教えを引き継ぐキリスト教によって変質させられてしまっていることを物語っていたのである。

イヴァンの大審問官がイエスに語って聞かせたことを解説するつもりは毛頭ないが、奇妙なことに、イエスの出現を民衆が悟り、「どういうわけでみんながそれを悟るか、という理由がすてきなのだ」とイヴァンは得意気に話しながら、それについては一言も説明していない。どうして民衆はイエスの出現を察知することができたのか。イエスは「ことさら異境のやからを烙く梵火のはぜる音もすさまじい土地をえらん」で、「15世紀前に三年間、人々のあいだを遍歴したと同じ人間の姿を借りて、いま一度民衆の間へ現われた」という設定になっている。イエスがどうして15世紀の異端審問の追及が激しいスペインのセヴィリヤを選んだのか、その理由について考えることが、イエス出現を民衆が察知する大きな手がかりであるにちがいない。

イエスが自分の死後の下界に現れるとなれば、それは当然最もふさわしい時期であらねばならなかった。一つは、自分の死後に自分が約束した神の世界が人類の世において成就せんとする、まさにその時期であった。人類がその偉業を達成せんとするその時期に、イエスがそれを確かめようとして出現することが考えられるけれども、しかしながら、少し頭を巡らすなら、イエスがわざわざ民衆の間に現れなくとも、人類がイエスを忘れず、彼の教えを念頭に置いて生きているということは、目にみえない姿でイエスはいつも民衆の間に現れているということであった。つまりイエスの下界来降は不必要であり、無意味であった。イエスが「ただほんの一瞬間でもいいから、わが子らを訪れたくなった」には、それなりの理由があった。それは、イエスの出現が最も歓迎されない世界が人類の地上に築かれつつある時をおいてほかになかった。作者のイヴァンからすれば、イエスは自分の死後に人類がどのように自分が構想した世界と相容れない世界を築いているか、天上に引っ込んでいずに一度見に来るがよい、イエスにはその義務も責任もあるというものであった。

イエスは自分が異端の徒として十字架に釘づけにされて見絶えた後にキリストとして

まつりあげられていく人類の歴史の中から、キリストの名をもって異端の徒が火刑に処せられていく、最大の反イエス＝キリスト的な時代に出現せざるをえなくなったのだ。イエスの出現の必然的な理由がそうだと、では民衆がどうしてイエスであることを悟るのか。イエスの死後、「イエスの復活」が真に民衆の中で待望されているわけではなかったが、容貌、身なり、佇まいなど、およそ目に現れるすべての面で、イエスが異教徒の雰囲気醸しだしていたからだと思われる。要するに、イエスは民衆が自分をキリストとして信じずに十字架に釘づけした15世紀前以上に、キリストの名で異端審問が吹き荒れる時代のほうが受け入れられない存在を示していたが故に、民衆はこの人が病人を癒したり、死者を甦らせたりするイエスでなければ、イエスにふさわしい人はもうこの世のどこにもいないと思い込んでしまったのだ。

イヴァンの詩劇のもう一つの問題点は、イエスよ、おまえこそ火刑に価する最大の人物なのだと語り終えた大審問官にイエスが「静かに接吻した」、そのことの意味である。つまり、接吻にイエスが「答えの全部」を込めたことの意味だ。ここには、「すべてが許されている」というドストエフスキイの思想が集約されているかもしれない。人類が生き（残る）ためにイエスを捨てて、悪魔と手を結んだことになったとしても、それはイエスを見捨てなかった場合と同様に、「許されている」ということなのだ。イエスの「接吻」について考えることは、イエスが最大の異端者として扱われる時代に出現したことを彼自身がどのように受けとめるか、ということであった。人類はイエスの死後、イエスに従わずに悪魔に従うことを自らの自由意志で決定したのだから、イエスの二度目の出現には何の意味もないことは明白であった。もはやイエスは無用の人であったのだ。

一体お前は何をするために現れたのだ、我々のじゃまをするために現れたのか、と大審問官はイエスに言ったが、イエスにはじゃまをする余地すら自分になくことがわかっていたので、無言のままでいる以外になかった。だが、無言はイエスの言葉を待ち望んでいる老人にとっては、拒絶に等しかった筈だ。しかし、老人に対する拒絶はイエス自身に対する拒絶でもあった。イエスの死後、すべての事業を弟子たちに預けた以上、イエスの出現が拒絶に帰着してはならなかった。イエスに唯一残されていることは、自分の事業を訂正した人類を、それでも「我が隣人を愛する」ように愛することであった筈だ。この「愛する」ことにおいて人類の罪を最も大きく、深く罰していたにちがいないのである。接吻された老人が「ぎくりとなった」のは、イエスから遠去かった自分たちが「愛する」ことから遠去かり、果てに異教徒狩りに躍起となっている自分たちの（愚かな）姿に一瞬気づいたからであろう。このイエスの大審問官への、人類への「接吻」こそ、最大の奇跡であり、イエスの出現の最大の意味であったと思われる。キリストの中に真理がなかったとしても、真理よりもキリストと共にあることを望んだドストエフスキイは、イエスの「接吻」の中にすべての敵対関係を無化してしまう「愛」を含ませ、人類にとっての真理の上位に置いたのである。

2004年8月30日記

」

。》